

小さな喜び

人生は、大きな喜び、哀しみ、怒り、諦め、悩みなどがまぎって、続けてやって来たり、交互にやってきたり、を繰り返している。

小さな喜びや哀しみ・怒りなどは、もっと頻度が高いただろう。例えば、ボクの経験だが、50円玉を1個拾っただけで小さな喜びを味わえる。

仕事からみで言えば、血圧を下げる薬や抗生物質などを処方してドンピシャできわめて有効だったとき、やや大きな喜びを感じる。

ボクの注射はあまり痛くないという評判は、若い頃からである。何年か前に高校生の男の子に皮下注射をしていたとき、すでに針も刺さっているし、内容液もはいつているとき、「はいつてるんですか！」となかば振り向いて怒ったように言った時、思わず、ニヤツとしてしまった。

インフルエンザのワクチンを打っているとき、痛くない！という人はいくらでもいるが、これは、「思っていたよりも痛くなかった」という意味だろうと解釈している。まれに痛かったあと捨て台詞で帰るのもいるが、では他所でうってもらったらい、というのがワタシの本音。

つい先日、ある男性が来て、ワクチンを打ったあと、「**天才的に痛くない注射をする**」と褒めてくれた。傍らにスタッフが2人いたのだが、彼女らもびっくり仰天。この上ない褒め言葉である。大きな喜びかもしれない。・・・つまり、そうあろうとしてきて、それなりの努力をしてきた結果を賞賛してくれたのだから。この方は、自分の子供（幼児）にもうってくれないか、とも言った。近くの小児科は、注射が下手で、・・・

注射にまつわる話はいくらでもある。学生の頃、精神薄弱者の施設に実習に行った。予防接種のとき、順番を待っている男の子が、「先生、痛いけ？」を繰り返す。ブスツとつきさあさっているのに、「先生、痛いけ？」となおも尋ねた、という。

現役の小児科である父親。以前いた病院に幼児を連れてきて、脱水症の治療をする。小児科数人がたばになっても点滴が入らない。脱水で血管がふくれないからで、当然である。親がでてきてゴチャゴチャするのはよくない。小児科にまか

せれば、つまり、他人に委ねたほうがいいのにな、と思っていた。たとえば、脱水のとき、点滴をするなら、肘関節や指先など固定が困難なところに血管がうっすら見えるなら、まず、20ml か 50ml でもいいから静脈注射をしておいてから、おもむろに固定できる部位で血管をさがせばいい。「親」がしゃしゃりでると、まあ、邪魔にしかならない。小児科の友人と呑みに行こうと言っていたのになかなかでてこない。血管をさがしていたのである。やむなくワタシも手伝っていて、ワタシのほうが先に点滴した。この血管は、数日後にその子が亡くなるまでしっかりと補液の役にたったという。人にもよりますが、さすがに腕は落ちたけれども、今でも小児科の何割かよりもボクの方が上手いと思っている。